

徳島県立文学書道館 文学特別展

高村薫の見た空海



高野山を歩く作家の高村薫

もしタイムマシンがあったなら、
私は誰よりも生きた空海その人に会ってみたい。

2017年 12月16日(土) ~ 2018年 2月8日(木)

「空海」の題字は
高村薫・筆

◆関連イベント

- ・高村薫講演会「21世紀の空海」
12月17日(日) 14:00~15:30
※申込必要・先着200人
- ・朗読会「高村薫『空海』を読む」
1月13日(土) 14:00~15:00
※聴講は申込不要

◆開館時間 9:30~17:00

◆休館日 月曜日(ただし1月8日は開館、9日休館)
年末年始(12月28日~1月4日)

◆観覧料

一般 510円(400円) / 高校・大学生 350円(280円)
小・中学生 250円(200円)

※()内は20人以上の団体割引料金。小・中・高校生は土・日・祝日・冬休み
期間中無料。高齢者(65歳以上)と各障がい者手帳をお持ちの方は半額。

※講演会に手話通訳をご希望の方は、3週間前までに当館までご連絡
ください。観覧に際しては、「座面高可変型車いす(介助式)」も用意
しておりますので、ご希望の方は申し出ください。

主催

徳島県立文学書道館

後援

徳島新聞社・NHK徳島放送局・四国放送

特別協力

高野山真言宗総本山金剛峯寺
(公財)高野山文化財保存会
新潮社・共同通信社・大塚オーミ陶業(株)



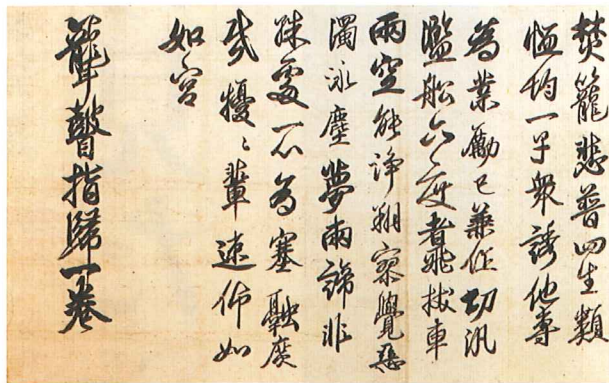
今なお多くの人々の心の拠り所になっている弘法大師・空海。阪神淡路大震災に自宅で遭遇し、仏を想うようになったという作家の高村薫（1953年—）は、2013年から約2年がかりで高野山や徳島県内の札所など日本各地を訪ね、21世紀の空海像を探りました。空海の偉大さに出会い、驚きの連続だったという旅の思索ドキュメントは、共同通信から配信され、徳島新聞などに連載された後、15年に単行本『空海』（新潮社）として刊行されました。

本展では、同書をもとに、取材時の写真や参考資料に加え、高野山や四国第23番札所薬王寺（徳島県美波町）所蔵の空海ゆかりの品々を展示し、高村薫が捉えた空海の実像に迫ります。

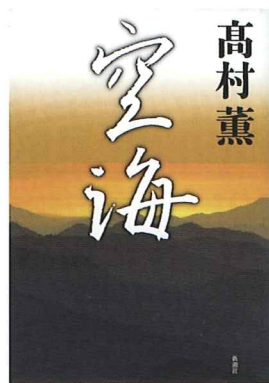


高野山で取材する高村薫

高村薫（たかむら・かおる）
1953年大阪生まれ。社会問題を取り上げながら、人間の内面を鋭く描いている。93年、『マークスの山』で直木賞受賞。著書に『リヴィエラを撃て』『レディ！』『ジョーカー』（98年 毎日出版文化賞）、『新リア王』（2006年 親鸞賞）、『太陽を曳く馬』（09年 読売文学賞）などがある。近著は『土の記』。



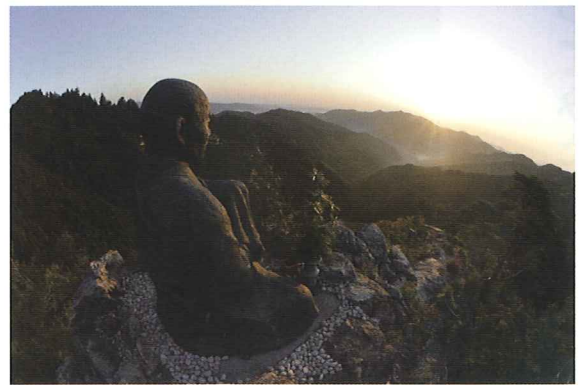
空海（弘法大師）筆「鷲誓指歸（ろうこしいき）下巻卷末（国宝、高野山金剛峯寺蔵、複製展示）



高村薫著『空海』（新潮社）



修行中、空海の口に明星が飛び込んできたという逸話を描いた「版本高野大師行状図画」巻第一（高野山宝寿院蔵）



空海が修行したとされる21番札所太龍寺（阿南市加茂町）近くの舎心ヶ嶽も高村は訪ねた



交通アクセス（JR徳島駅から）

◆徒歩 約15分

JR 徳島駅西側のポツポツ街を抜けて右折。踏切と助任川を越え、3つめの信号交差点を右折して約300m。徳島中学校東隣。

◆バス

〔徳島市営バス〕
7番乗り場「川内循環線（右回り）」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。

〔徳島バス〕
2番乗り場「前川経由」に乗車。「吉野本町2丁目」で下車し、徒歩で約5分。

◆タクシー・自動車 約5分

国道192号線、藍場町交差点を北進。助任川を越え、4つめの信号を右折して約300m。

◆駐車場

当館北側にあります（43台、大型バス2台）。

高村薫講演会（12月17日）の申込方法

はがき・Fax・メールのいずれかに「高村薫講演会希望」と明記の上、郵便番号・住所・氏名（ふりがな）・年齢・電話番号を記入し、表面の宛て先までお申し込みください。当館1階受付でも申し込みます。